

いや、鬼なんていないって思ってるでしょ？確かにね、『実は私ったら鬼なんです』っていうカミングアウトは受けたことないですけど、でもいないとも限らないでしょ？

え？ツノが生えてるからすぐ分かる？

いやいやいや、だっていません身近に？一年中帽子被ってるような人。ひよっとしたらその人の帽子をヒョイと外したら中からドリルみたいのが……ねえ？

え？肌の色が違うだろって？まあ確かに一年中青ざめてる人だとか一年中酒飲んだみたい赤い人ってのにはなかなかお目にかかれないですけど、でもほら、ファンデーションってのがあるじゃないですか。いるでしょ？一年中宝塚みたいな厚化粧の人。ひよっとしたら化粧を落としたら……ねえ？

え？え？鬼ってのは毛むくじゃらだ？鬼ってのは巻き毛だ？

だからね、よく考えましょうよ。毛むくじゃらな人なんていくらでもいるし、それに今ではレーザー脱毛ってのがあるんですよ。渋谷のキャッチにちょっと捕まれば、ほんの2～30万でお肌トゥルトゥルですよ。

巻き毛なんてもっとですよ。ビックカメラ行ってごらんささい。なんだかよく分からないけれど、マイナスイオンの出るストパーの機械とか売ってますよ。鬼だってストパーかけてるかもしれないでしょ？

どうしてそんなに鬼がいるって言いたいかって？それはね、実はつい去年まで身近にいたからかもしれないからなんですよ。

僕が彼女に会ったのは大学に入ってすぐ。特に何をやりたいてのものなかったから、なんだか知らないうちに流れで入ってたテニスサークルで。

実はウチ実家が酒蔵をやっててですね。僕ったら家系的に以上にお酒に強いんです。だから周りの先輩達がどんどん潰れてっても僕は平気な顔してて……一体これは誰の歓迎コンパなんだって思ってたならテーブルの向こうにもう一人平気な顔した女の子がいて。結局僕と彼女で総勢30人近い先輩のお守り。

なんだかサバサバしてて、愛嬌もなくって、まあ確かに顔立ちは綺麗なんだけど、ちょっと近寄りたがいし話しかけづらいなあなんて思ってたらいつの間にか同じ家に住んでて。

まあこれが大学生ってものなんだろうな。

東男に京女。なんていうけど僕らの場合は全くの逆。彼女は本当に男らしくて。逆に僕は女々しくて。だから彼女に惚れちゃったのかしら。

だってほら、大学生は勉強するのが本分でしょ？だから僕は毎日大学行ってたし、試験だってちゃんと勉強して受けたから必然的にバイトする時間なんてなくなってくる。その分彼女は思う存分好き勝手なこととして、でも沢山働いてたから家賃も何も払ってくれて、ま

あ悪く言っちゃえばヒモだったのかな。

でもそんな僕だって彼女のこと好きですから。どうにかして喜んで欲しいなって思うんですよ。だからね、付き合ってた丁度3ヶ月目にですね、記念日だからって食事に誘ったんですよ。駅前で割引券を配ってた和食ダイニング。なんでも豆腐料理が自慢なんですって。彼女は最初あんまり乗り気じゃなかったけど、でも僕がどうにかくどき落として食事に行ったんですよ。

いや、恥ずかしい話なんですけど、僕こういう食事デートっていうんですか？初めてだったんで緊張しっぱなしで、とりあえずお店の名前のついたお薦めのカクテルを二つとあとはコースメニューを頼んだんです。

僕はただお酒が強いだけなんだけど、彼女はお酒が大好きでしかも強い。だからまだ料理も来てないうちに一体何杯飲んだことか……。口の周りにさくらんぼのカスとかついたりして、それを僕がぬぐってあげたりして、なんかこれはこれで幸せな時間かなって思ってたんだけど決してそんなんじゃないかなって思ってたんです。

次から次から来る料理。冷奴に豆腐のピザに豆腐コロケに豆腐の……。なんだかよく分からないのがあれこれと……。でも彼女全然食事に口をつけない。『どうしたの？豆腐嫌いだった？』って聞くと無言でコクリ。ゴメンゴメンって謝っても彼女は別にいい。お酒があればいいってメニューの左上から右下までの全部のアルコールを2週半。いくらお酒が強いっていったって空腹でそれだけのんだら彼女だって荒れてくる。食事があることなんて気にせずに机につぶして。机の上は百鬼夜行が通り過ぎた後かのようにグッチャグチャ。食べ物彼女の服に……。だから僕必死になって布巾で拭いて、彼女を抱きかかえてお水飲ませてあげて。結局お店が閉まっても彼女はフラフラで、とても帰れる状態じゃなかったから、近くのファミレスに入ってずっと彼女を近くで介抱して……。で、気がついたら僕も寝てた。で、起きたら彼女は隣で目玉焼きハンバーグを食べてたんです。で、で、起きた僕に『キミはマメだねえ』って……。

褒められたのかなって嬉しくてちょこっと頷いたら彼女『ごめん。キミのことはきつと好きだけど、分かったわ。やっぱりウチの家系はマメとは相性悪いかもしれない』って。なんだかよく分からなかったけど、彼女は被ってた帽子を脱ぐと大あくびをして頭を掻きむしって、で、ポケットからクシャクシャの千円札を取り出すと『釣りはいらないよ』って、ただそれだけ言って一人で帰って行って。

僕は寝ぼけ眼だったけど、帽子を外した彼女の頭は掻きむしる前からボサボサで、しかもその中に何か見えた気がして……。

それ以来彼女はウチには帰って来ないし大学でも顔を合わせない。別に未練を引き摺ってるわけじゃないんだけど、でもやっぱりもう一度会いたいなって思うんですよ。

だからね、節分には必ず玄関先で豆をまこうかなって。

え？やるのが逆じゃないかって？違くて、だって普段の僕だったら撒いた豆が気になってすぐに掃除してるもの。でもこの日だけは撒いた豆をそのままにしておく。ほら、僕だ

って案外マメじゃないんだよって。
ああ恥ずかしい。

【終】

※2005年2月3日 岩本憲嗣